

向社会的行動の結果に関する質的検討

二 村 郁 美¹⁾

問題と目的

電車で席を譲ったり、募金に協力したりといった「他者のためになることを意図した行動」のことを、向社会的行動という (Eisenberg, Fabes, & Spinrad, 2006)。向社会的行動は、一般的には他者に利益をもたらすことが想定されている (Penner, Dovidio, Piliavin, & Schroeder, 2005)。たとえば Bartlett & DeSteno (2006) では、他者から援助を受けた人は援助をしてくれた相手に返報をしやすだけでなく、第三者に対してもより向社会的に振る舞うというポジティブな連鎖の存在が示されている。その一方で、他者から援助を受けることによって、被行為者はポジティブ感情だけでなく恥や負債感、居心地の悪さ、申し訳なさなどの感情を抱くこともあり (Naito, Wangwan, & Tani, 2005)、向社会的行動が必ずしも常にポジティブな結果をもたらすわけではないことも示唆されている (遠藤, 2000; Grusec, Hastings, & Almas, 2011; 松浦, 2007)。このように、向社会的行動は行為者や被行為者、第三者など、様々な立場の人に対して多様な結果をもたらすものといえる。

しかし、向社会的行動の意思決定プロセスを表したモデルでは、行動の実行に至るプロセスに焦点が当てられており、結果の段階は含まれていないものが多い。たとえば、Bar-Tal (1976) の非緊急事態における意思決定モデルは、初めに他者のニーズへの気づきの段階があり、続いて責任帰属とコスト・報酬計算の相互作用による判断プロセスが生じ、その過程を経て意思決定がなされ、行動が生じるという構成になっている。また、Latané & Darley (1970 竹村・杉崎訳, 1977) の緊急事態における介入モデルでは、緊急事態への注意、緊急事態発生という判断、個人的責任の度合いの決定、特定の介入様式の決定、介入の実行という5段階が想定されている。その他、Schwartz & Howard

(1984) の規範的意思決定モデルや松井 (1998) の状況対応モデルなど様々なモデルが提唱されているが、いずれも行動の実行が最終段階として位置づけられている。

結果の段階を含んだ数少ないモデルとしては、Eisenberg (1986) やその改訂版である Eisenberg et al. (2006) のモデルがあげられる。これらのモデルでは、向社会的行動後の自己評価を含めた結果が、向社会的なセルフイメージやコンピテンスなどの個人要因に反映され、その後の向社会的行動に影響を与えるというフィードバックループが仮定されている。しかし、このような結果に基づくフィードバックループについて検討した先行研究では、主に実験的に統制された場面において短期間に生じる現象が検討されてきた (Grusec, Kuczynski, Rushton, & Simutis, 1978; Moss & Page, 1972)。そのため、日常的な向社会的行動場面において実際にどのような結果が経験されており、それらの過去経験が、行動の意思決定プロセスにおいて人びとが抱く結果の予期や行動を実行する程度とどのように関連しているのかについては、十分に検討されていない。そこで本研究では、日常的な向社会的行動場面において、行動の実行や不実行の結果経験されている現象や、人びとが抱いている結果の予期、行動の生起状況などについて、半構造化面接という質的な手法を用い、ボトムアップ的に検討する。

方法

調査参加者

調査参加者は心理学を専攻する大学院生17名 (男性6名, 女性11名), 平均年齢22.59歳 ($SD = 0.80$) であった。

手続き

事前に行った調査協力のリクルートにおいて協力が得られた調査参加者に対し、個別連絡により日程調整を行った。2012年7月下旬から9月上旬にかけて、大学の心理学実験室において半構造化面接が行われた。調査実施時には、研究への参加の自発性やデータの取り扱いにおけるプライバシーに関する事項が口頭と書面によって説明された上で、研究参加同意書への署名を得た。面接

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程 (後期課程) (指導教員: 氏家達夫教授)

内容は個人情報守秘の了解を得て、ICレコーダーで録音した。面接時間は、平均69.29分 ($SD=15.55$) であった。

調査内容

「電車に座っていてお年寄りが近くにきた場面（電車場面）」、「人が落とし物をして気づかずに歩いて行こうとしている場面（落とし物場面）」、「街頭で募金の呼びかけをされた場面および店頭で募金箱をみかけた場面（募金場面）」の3場面について経験の有無を尋ね、経験があった場合には、その時の状況、思ったこと、考えたこと、その結果とった行動についてできるだけ詳しく回答を求めた。調査参加者の回答に基づき、内容についてより詳しく尋ねる質問を適宜行った。また、3場面の尋ね方については、先の場面に関して調査者が尋ねた内容が後の場面の回答に与える影響を最小限にするために、3場面すべてについて一通り調査参加者の自由な回答を得た後、各場面について、相手の外見や相手との距離、自分自身の状態、周囲の状況といった状況要因の影響などの追加の質問を行った。

結果

電車場面

行動の生起状況

電車場面において行動の生起に影響を与えていた状況要因は、主に「相手の特徴」、「自分の状態」、「相手との距離」の3つであった。回答内容から、電車場面において想定されやすかったのは、相手との距離が近い条件であった。そのため、相手との距離が近い場合における、相手の特徴（高齢・初老）と自分の状態（良い・悪い）を組み合わせた条件下での行動の生起状況を示した（Table 1）。

相手の特徴や自分の状態といった状況要因の影響が顕著にみられるとともに、特定の状況下では個人差もみられた。たとえば「相手が高齢・自分の状態が良い」条件では「譲る」という回答が、「相手が初老・自分の状態が悪い」条件では「譲らない」という回答が大多数であり、個人差は小さかったが、「相手が高齢・自分の状態

が悪い」条件や「相手が初老・自分の状態が良い」条件では、選択する行動に個人差がみられた。

結果の予期

お年寄りが席を譲られることを望まない可能性について、調査参加者である17名全員が言及した。そのうち13名は「声をかけずに席を空ける」や「相手が席に座ることを望んでいることが明確な場合にのみ譲る」、「初めから席に座らずに立っているようにする」などの方法をとることで、自分が席を譲って断られるという事態を回避していた。また、席を空けた時に、意図した相手とは異なる人が席に座ってしまう可能性について10名が言及した。

自分の行動実行時（成功・失敗）および不実行時における経験

成功時 お年寄りに席を譲って感謝された場面で経験された感情について、16名から回答が得られた。その内容は、「（感謝されて）うれしい」といったポジティブ感情が7名、「（お礼を）言われない方がラク」といったネガティブ感情が1名、「うれしいけど恥ずかしい」といったポジティブ感情とネガティブ感情の両者を含んだアンビバレントな感情が8名であった（Table 2）。

失敗時 お年寄りに席を譲る申し出をして断られた経験があると回答した人は17名中7名であり、7名全員がその際にネガティブ感情を経験していた。なお、断られた経験の内容について、高齢者という扱いを受けることに対する怒りを表出された人は1名のみであり、残りは「すぐに降りる」という理由や、遠慮によるものであった。ネガティブ感情の内容としては、気まずさや恥ずかしさといった感情に加え、「せっかく譲ったのだから座ってほしい」といった相手に対するネガティブ感情や、「失礼なことをしてしまった」といった自己に対するネガティブ感情などがみられた。また、意図した相手とは異なる人が席に座ってしまった経験について3名が言及した。

不実行時 自分が席を譲らなかった時の感情について、13名から回答が得られた。その内容としては、罪

Table 1 電車場面における行動の生起状況

相手の特徴 自分の状態	高齢		初老	
	良い	悪い	良い	悪い
行動				
譲る	15	8	3	2
どちらともいえない	2	4	9	3
譲らない	0	5	5	12

悪感や気まずさなどのネガティブ感情が11名、「罪悪感とかはそんなにはない」といったニュートラルが2名であった。

他者の行動実行時（成功・失敗）および不実行時における経験

成功時 他者がお年寄りに席を譲って感謝されている場面における評価について回答した人は15名であり、15名全員がポジティブな評価をしていた（Table 3）。ただしその中にも、「えらいなあ」や「やさしいな」といったものだけでなく、「普通にいい人だなみたいなの」といった、一般的に「良い」とされている行動をしているという現象理解に留まったものもあり、強度に差がみられた。

失敗時 他者がお年寄りに席を譲って断られている場面において経験された感情について、6名から回答が得られた。その内容としては、行為者に対する同情や、申し出を断ったお年寄りに対するネガティブ感情などであった。

不実行時 他者が席を譲らなかった時に抱いた評価について9名から回答が得られた。その内容は、「何も思わない」といったニュートラルが2名、「近くのやつ誰か譲れよって思いはする」といったネガティブが4名であった。なお、ネガティブ評価について言及した4名のうち2名の発言は、席を譲らない人が優先席に座っている場合におけるものであった。

落とし物場面

行動の生起状況

落とし物場面においては、「落とし物がごみではない」、「落とし主が特定できる」、「より近くにいる第三者が代わりに拾うことが想定されない」という基本的な条件を満たした状況下では、17名中16名が「拾う」と回答した。すなわち、一般的に落とし物場面として想定されやすい状況では大多数の人が行動しており、各状況下での個人差は小さかった。

結果の予期

相手が落とし物を届けられることを望まない可能性について、3名が言及した。また、2名が「落とし主に恥ずかしい思いをさせてしまわないように、少し間をおいてから、本人が気づかなかったら拾う」という方法をとっていた。

自分の行動実行時（成功・失敗）および不実行時における経験

成功時 自分が落とし物を届けて相手から感謝された時の感情について、16名から回答が得られた。その内容は、「いいことをした」や「一連の流れが終わってよかった」といったポジティブ感情が11名、「特にいいこ

とをしたとは思わない」といったニュートラルが3名、ネガティブ感情が1名、アンビバレントな感情が1名であった（Table 2）。

失敗時 自分が落とし物を届けて断られた経験があると回答したのは17名中1名のみであった。その際にはネガティブ感情が経験されていた。

不実行時 落とし物場面では大多数の人が「拾う」と回答しており、落とし主が特定でき、相手にとっての落とし物の必要性が明確な状況においても行動を実行しなかった経験があると回答した人は2名のみであった。この2名はともに後悔などのネガティブ感情を経験していた。

他者の行動実行時（成功・失敗）および不実行時における経験

成功時 他者が自分以外の他者に落とし物を届けて感謝されている場面を見た時の評価について、13名から回答が得られた。その内容は、ポジティブ評価が9名、ニュートラルが4名であった（Table 3）。ただし電車場面同様、ポジティブ評価については強度に差がみられた。

失敗時 他者が落とし物を届けて断られる場面をみたことがあると回答した人はいなかった。

不実行時 落とし物を届けていない他者をみた経験があると回答した人は1名のみであり、その際にはネガティブ感情が経験されていた。

募金場面

行動の生起状況

本研究において「街頭募金に日常的に協力する」と回答した者はおらず、「街頭募金・店頭募金ともに一切協力しない」と回答した者が6名、「店頭募金であれば日常的に協力することがある」と回答した者が9名いた。募金場面においては、募金の内容やその時点での所持金、人通りなどの状況要因が行動に影響すると回答した人は少なく、金銭的なコストを負うことに対するネガティブ感情や、周囲から目立つことに対するネガティブ感情、街頭募金に対する不信感など、募金に関する個人の価値観や認知に関する発言が行動の決定理由としてあげられることが多かった。なお、本研究では募金場面として街頭募金と店頭募金の両方についての経験を尋ねたが、自分や他者の行動実行時あるいは不実行時における評価・感情の回答が得られたのは主に街頭募金に関してであったため、以下では街頭募金に関する回答のみを扱う。

また、募金への協力は基本的に援助要請を受けて行われるものであるため、行為者が自分の場合と他者の場合ともに、行動を実行して断られるといった失敗経験に関する回答はみられなかった。

Table 2 各場面における自分の行動成功時に経験された評価・感情

場面	自分の行動成功時に経験された評価・感情					計
	ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ	アンビバレント	回答なし・その他	
電車	7	0	1	8	1	17
落とし物	11	3	1	1	1	17
募金	0	1	1	0	15	17

Table 3 各場面における他者の行動成功時に経験された評価・感情

場面	他者の行動成功時に経験された評価・感情					計
	ポジティブ	ニュートラル	ネガティブ	アンビバレント	回答なし・その他	
電車	15	0	0	0	2	17
落とし物	9	4	0	0	4	17
募金	2	11	2	2	0	17

結果の予期

呼びかけ者が協力を望んでいない可能性についての発言はみられなかった。一方、街頭募金の呼びかけ者に対する不信感や、協力したお金が実際に援助を必要としている人の元に届かない可能性については13名が言及した。なお、協力したお金が必要な人の元に届けられない可能性に関する内容を他者から教わったり聞いたりした経験について言及した人は、6名であった。また、「『ありがとうございます』って言われるのがあまり好きじゃない」や「目立っちゃうのがいや」など、行動を実行した際に呼びかけ者から感謝を表出されたり周囲から注目されたりすることによって生じるネガティブ感情の予期について、9名が言及した。

自分の行動実行時および不実行時における経験

実行時 自分が街頭募金に協力して感謝された時の感情について、2名から回答が得られた。その内容は、ニュートラルが1名、「『入れた人』みたいにみられるのがやだ」といったネガティブが1名であった(Table 2)。その他に、募金に協力した際に相手から感謝されず、ネガティブな感情を経験した人が1名いた。

不実行時 自分が街頭募金に協力しなかった時の感情について、16名から回答が得られた。その内容は、ニュートラルが10名、「気まずい」や「申し訳ない気持ちにな

る」といったネガティブ感情が6名であった。なお、ネガティブ感情についてはいずれも、呼びかけ者との関係において生じるものであった。

他者の行動実行時および不実行時における経験

実行時 街頭募金に協力している他者をみた時の評価について、17名全員から回答が得られた。その内容は、「えらいと思う」といったポジティブ評価が2名、「どういふ思いでいれているのが気になる」や「特に何も思わない」といったニュートラルが11名、「偽善的に感じる」といったネガティブ評価が2名、アンビバレントが2名であった (Table 3)。

不実行時 街頭募金に協力していない他者に対する評価について15名から回答が得られ、その内容は15名全員がニュートラルであった。具体的な回答は、「募金しない人の方が普通」や「自分も入れないから何も思わない」などであった。

考察

本研究の結果の概要

行動の生起状況について、電車場面では状況に応じて行動を実行する程度が大きく異なっており、コストは低いが援助の必要性が不明確な状況や、援助の必要性は明確であるがコストが高い状況などにおいては、行動実行

の個人差も大きかった。また、落とし物場面では大多数の人が行動を実行しており、他者の行動の不実行をみる機会も少なかった。一方、募金場面のうち特に街頭募金では大多数の人が行動を実行しておらず、「街頭募金には協力しないことが一般的」という認識が持たれていた。これらのことから、電車場面は比較的行動の実行の個人差が大きい場面、落とし物場面は行動が実行されやすい場面、募金場面は行動が実行されにくい場面というように、場面や状況によって行動が実行される程度に差があることが示された。

次に、結果の予期について、電車場面では行動が相手に受け入れられない可能性が予期されやすかったことに加え、効果が意図した相手に及ばない可能性についての予期もみられた。それに対し、落とし物場面のような一般的に実行されやすい行動では、全体的にネガティブな結果についての予期が抱かれにくかった。募金場面では、相手に受け入れられないという予期は抱かれにくかったが、援助を必要としている人たちに効果が及ばない可能性や周囲から注目されることによってネガティブ感情を抱く可能性についての予期が多くみられた。

また、行動の結果については、電車場面では行動の失敗時と不実行時ともにネガティブ感情が経験されており、さらに成功時であっても半数近くの人がアンビバレントな感情を経験していた。一方、落とし物場面では、自分の行動時にネガティブ感情が抱かれることは少なかった。募金場面では、街頭募金への協力経験自体が少なかったため、自分の行動時における経験についてはあまり回答が得られなかったが、他者に対する評価は、行動の実行時・不実行時ともにニュートラルが多数であった。このように向社会的行動は、その行動が実行される程度や結果の予期、行動の実行時および不実行時において経験される評価・感情が、場面や状況によって異なっていた。また、大多数の人が同様の感情を抱いたり、同じ行動傾向を示す場合がある一方で、同じ状況であっても人によって異なる結果が予期されたり、異なる行動が選択される場合もあり、個人差の表れ方も場面や状況によって異なることが示された。

本研究の結果からの示唆

本研究の結果、日常的な向社会的行動場面において、ネガティブな結果の予期やネガティブな経験が比較的多くの人によってなされていることが明らかになった。その背景には、複数の種類の「結果の不明確さ」があると考えられる。1点目は、被行為者が向社会的行動を望んでいるか否かに関する不明確さである。たとえば、本研究では電車場面において、相手が席を譲られることを望んでいない可能性について全員が言及しており、7名が

実際に席を譲ろうとして断られてしまった経験があると回答していた。2点目は、意図した相手に効果が及ぶか否かに関する不明確さである。この点について、電車場面では、意図した相手と異なる人が席に座ってしまう可能性について10名が言及しており、実際にそのような経験をした人も少数ではあるが3名いた。また、募金場面においては、援助を必要としている人の元にお金が届かない可能性について13名が言及していた。なお、電車場面においては、意図した相手に効果が及ばない経験が直接的になされるが、募金場面では、必要としている人の元にお金が届けられているか否かを直接確認することはできないため、お金が届けられないというネガティブな結果に関する情報を聞くことで間接的な学習がなされていた。

このように、日常的な向社会的行動場面においては、行為の実行が被行為者に利益をもたらすか否かが不明確な場合が少なからず生じており、そのことがネガティブな結果の予期やネガティブな経験につながっていることが示唆された。また、ネガティブな結果の予期とネガティブな経験に関する発言が多くみられた電車場面と募金場面では、落とし物場面に比べて行動が実行されにくかった。このように、ネガティブな経験とそれに基づくネガティブな結果の予期はいずれも向社会的行動の抑制に関わる重要な要因であり、向社会的行動の意思決定プロセスモデルには、行動の結果の段階やそれに基づくフィードバックループも含める必要があると考えられる。ただし、本研究では過去経験の内容、結果の予期および行動の実行についての個人内での関連は検討していないため、今後は縦断的な手法を用いて、向社会的行動における過去経験に基づくフィードバックループの存在やその具体的なプロセスについても検討していく必要がある。

また、本研究の結果からは、被行為者に対する影響が不明確であるだけでなく、行為者が受ける評価についても必ずしもポジティブとは限らないことが示された。たとえば、募金場面において他者の行動実行時と不実行時になされる評価はともに大多数がニュートラルであり、向社会的行動の実行は必ずしも他者からポジティブな評価を受けるわけではなく、不実行も必ずしも他者からネガティブな評価を受けるわけではないことがうかがえる。このように、向社会的行動の実行は、行為者に対する第三者からの評価という側面においても不明確さを含んでいると考えられる。

従来の研究においては、これらの結果の不明確さについて、十分に扱われていないように思われる。たとえば進化心理学領域では、向社会的行動の類似概念である利他行動 (altruistic behavior) を扱った研究が多数行われ

ている。そこでは、評判による間接互惠性が利他行動の進化における重要なメカニズムであることが実証されており (Nowak & Sigmund, 2005; Rand & Nowak, 2013), 向社会的行動の実行は他者からのポジティブな評価につながるものが想定されている。これは、そもそも進化心理学で扱われている利他行動が「自らの適応度を下げ、他者の適応度を上げる行動 (長谷川・長谷川, 2000)」と定義されるものであることに基づいていると考えられる。すなわち進化心理学領域では、その行動の実行が被行為者にとって利益になることは前提であり、被行為者の立場からも社会規範との適合性の観点からも、必要性や適切性が明確な行動のみが対象とされている。そのため、そこで問題とされているのは、行為者にとって「やるべきであるが、やりたくない」という現象である。この時、その行動の実行は他者からのポジティブな評価につながり、不実行はネガティブな評価につながるものが想定される。

一方、本研究でみられたように、現実にはある行動を実行することの必要性や適切性自体が曖昧な場合も多く、「やるべきかどうかかわからない」といった問題が広く生じていると考えられる。特に、コストがかかる行動を実行するにも関わらず、その行動が相手の利益にならなかったり、第三者からポジティブな評価を受けなかったり、場合によってはネガティブな評価さえ受ける可能性があるという状況は、向社会的行動を実行する上で非常に大きな心理的障壁となりうるものである。今後、このような結果の不明確さによる抑制メカニズムについても、より焦点を当てて扱っていく必要があるだろう。また、本研究では、電車場面において自分の行動成功時であってもアンビバレントな感情が経験されており、募金場面においても、行動を実行した結果ネガティブな感情を抱くことが予期されていた。Dunn, Aknin, & Norton (2008) や Aknin, Dunn, & Norton (2012) では、向社会的行動を実行すると行為者はポジティブ感情を抱くことが示されているが、本研究の結果、行為者が抱く感情についても向社会的行動の種類や状況によって異なることが示唆された。

向社会的行動は、援助やいたわり行動、分与、協力、慈善活動、社会奉仕活動などの多様な行動を含んだ幅広い概念である (Batson, 2012)。そのため、向社会的行動について正確な理解を進めるためには、各研究において提出される多様な知見が、どのような種類の向社会的行動において、どのような状況下で、どのような特徴を持つ人びとに当てはまるものなのかという点について、包括的に整理する必要があるだろう。

本研究の限界と今後の課題

本研究の限界としては、第1に、面接調査の構造化の低さがあげられる。本研究では、人びとが日常的な向社会的行動場面において実際に経験している内容について検討することを目的としていたため、自由度の高い半構造化面接という手法を用いた。しかし、回答に応じて適宜質問項目の追加や変更を行ったため、調査参加者間で質問項目を十分に統制できなかった。今後は、本研究で得られた知見に基づいて、向社会的行動に関する過去経験がその後の結果の予期や行動の実行に及ぼす影響について、量的な手法を用いて実証的に検討する必要がある。

第2に、回想法を用いて意識的な側面について尋ねた点があげられる。本研究では、生態学的妥当性の高いデータを得ることを目的としていたため、実験などではなく、日常的な向社会的行動場面において実際に経験されている内容を想起してもらう面接調査の形をとった。しかし、実際の行動指標ではなく、意識化された内容について言語報告を求めたため、社会的望ましさによる回答の歪みが生じている可能性は排除できない。また、回答者自身が過去の向社会的行動場面における自分の感情や認知を正確に想起できていないために、無意図的な回答の歪みが生じている可能性もある。今後は、実際の行動指標も併せて測定するなどして、より信頼性・妥当性の高いデータを収集する必要がある。

第3に、サンプルの少なさと偏りがあげられる。本研究では、心理系大学院生17名という限られたサンプルを対象としていたため、本研究で得られた知見の一般化可能性については、専攻や年齢などが異なる他のサンプルに対しても調査を行い、検討する必要がある。

引用文献

- Aknin, L. B., Dunn, E. W., & Norton, M. I. (2012). Happiness runs in a circular motion: Evidence for a positive feedback loop between prosocial spending and happiness. *Journal of happiness studies*, 13, 347-355.
- Bar-Tal, D. (1976). *Prosocial behavior: Theory and research*. Washington, DC: Hemisphere Publishing Corporation. pp. 51-83.
- Bartlett, M. Y., & DeSteno, D. (2006). Gratitude and prosocial behavior: Helping when it costs you. *Psychological Science*, 17, 319-325.
- Batson, C. D. (2012). A history of prosocial behavior research. In A. W. Kruglanski & W. Stroebe (Eds.), *Handbook of the History of Social Psychology*.

- New York: Psychology Press. pp. 234-264.
- Dunn, E. W., Aknin, L. B., & Norton, M. I. (2008). Spending money on others promotes happiness. *Science*, 319, 1687-1688.
- Eisenberg, N. (1986). *Altruistic emotion, cognition, and behavior*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.
- Eisenberg, N., Fabes, R. A., & Spinrad, T. L. (2006). Prosocial behavior. In N. Eisenberg (Ed), *Handbook of child psychology: Vol. 3, Social, emotional, and personality development*. 6th ed. New York: Wiley. pp. 646-718.
- 遠藤利彦 (2000). 思いやりの「ある・なし」とはどういうことか—気持ちと言動の不一致 児童心理, 54, 743-748.
- Grusec, J. E., Hastings, P., & Almas, A. (2011). Prosocial behavior. In P. K. Smith and C. H. Hart (Eds), *The Wiley-Blackwell Handbook of Childhood Social Development*. 2nd ed. Malden: Wiley-Blackwell. pp. 549-566.
- Grusec, J. E., Kuczynski, L., Rushton, J. P., & Simutis, Z. M. (1978). Modeling, Direct instruction, and attribution: Effects on altruism. *Developmental Psychology*, 14, 51-57.
- 長谷川寿一・長谷川真理子 (2000). 進化と人間行動 東京大学出版会
- Latané, B., & Darley, J. M. (1970). *The unresponsive bystander: Why doesn't he help?* New York: Appleton-Century-Crofts.
- (ラタネ, B., ・ダーレー, J. M. 竹村研一・杉崎和子 (訳) (1977). 冷淡な傍観者——思いやりの社会心理学—— ブレーン出版)
- 松井 豊 (1998). 援助行動の意思決定過程モデル 松井 豊・浦 光博 (編) 人を支える心の科学 誠信書房 pp. 79-113.
- 松浦 均 (2007). 不適切な援助を受けた場合の被援助者の感情について 人文学部研究論集, 17, 29-41.
- Moss, M. K., & Page, R. A. (1972). Reinforcement and helping behavior. *Journal of Applied Social Psychology*, 2, 360-371.
- Naito, T., Wangwan, J., & Tani, M. (2005). Gratitude in university students in Japan and Thailand. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 36, 247-263.
- Nowak, M. A., & Sigmund, K. (2005). Evolution of indirect reciprocity. *Nature*, 437, 1291-1298.
- Penner, L. A., Dovidio, J. F., Piliavin, J. A., & Schroeder, D. A. (2005). Prosocial behavior: Multilevel perspectives. *Annual Review of Psychology*, 56, 365-392.
- Rand, D. G., & Nowak, M. A. (2013). Human cooperation. *Trends in Cognitive Sciences*, 17, 413-425.
- Schwartz, S. H., & Howard, J. A. (1984). Internalized values as motivators of altruism. In E. Staub, D. Bar-Tal, J. Karylowski, & J. Reykowski (Eds.) *Development and maintenance of prosocial behavior*. New York: Plenum Press. pp. 229-255.

(2014年8月29日受稿)

ABSTRACT

A qualitative study of consequence of prosocial behavior

Ikumi FUTAMURA

This study examined about the consequences and expectation of consequences in several kinds of everyday prosocial behavior. Semi-structured interviews were conducted with 17 graduate students (6 men, 11 women). The interviews were about emotion, cognition, and behavior experienced in the following three real life scenes: giving a seat to elderly people on a train (train scene), reporting a lost belongings (lost belonging scene), and making a donation for charity (donation scene).

The main findings were as follows: (1) prosocial behavior was more likely to be performed in lost belonging scene, train scene, and donation scene respectively. (2) In train scene, it was ambiguous whether performing prosocial behavior was helpful for the recipient, and negative emotion was experienced in both situations: the behavior had not been performed and when it had been performed but it had not been accepted. (3) In lost belonging scene, negative emotion was not likely to occur, and it was expected that performing the behavior would be helpful basically. (4) In donation scene, negative emotion was likely to occur, donors were not likely to be evaluated as positive, and non-donors were not likely to be evaluated as negative. From these findings, when performing prosocial behavior, there are several ambiguities about the consequences: ambiguity of recipient's need, ambiguity of the recipient's utilization of help, and ambiguity of evaluation to benefactor. It was suggested that those ambiguities were significant inhibition factor of prosocial behavior.

Keywords: prosocial behavior, consequence, ambiguity, qualitative study